

氏名	須賀京子 (学籍番号 12DN02)
学位の種類	博士 (看護学)
学位記番号	第3号
学位授与年月日	2015年9月18日

論文題目 高齢者施設に入所している認知症女性高齢者の夕暮れ症候群の緩和と生活機能の改善を目指すフェイスクアプログラムの開発

論文審査担当者	委員長	木下幸代	教授
	委員	渡邊順子	教授
	委員	藤井徹也	教授
	委員	山下香枝子	教授
	委員	新宮尚人	教授

論文要旨

I. 研究の背景

高齢社会が日々進行する日本において、認知症を伴う高齢者が増加している。認知症ケアの現場では、行動・心理症状 (behavioral and psychological symptoms of dementia: 以下、BPSD) や生活機能の障害が介護負担の原因となっている。特に夕暮れから夜間にかけて運動過多・混乱が起こる状態は夕暮れ症候群と呼ばれており、看護・介護者は対応に苦慮している。認知症高齢者にとっても、夕暮れ症候群の出現により生活機能に支障をきたすと考えられるが、現状では有効な手立てが少ない。近年、高齢者への化粧療法が高齢者の心身の健康を高めることが報告されているが、スキンケアのみでも自分で顔をマッサージすることによる皮膚からの心地良い刺激は心身両面に影響を与え、ストレス反応を制御する。高齢者自身で手を動かし顔面の皮膚への刺激を与えることは、身体運動と安らぎや癒しの感覚を引き出すことから、スキンケアは夕暮れ症候群の緩和と生活機能の維持・改善に有効な方法と考える。現状では、認知症高齢者だけを対象とした、セルフケアとして日常的に行うスキンケアに着目した報告はみられない。

II. 研究の意義

本研究では、スキンケアをフェイスクアと定義した。セルフケアを基本とするフェイスクアは、認知症における夕暮れ症候群を緩和でき、夕方から夜間にかけての興奮や運動過多が抑制されることで生活機能の改善につながる。さらに看護・介護職者の介入のもと、小集団でのフェイスクアの実施により、他者とのコミュニケーションの機会が増え、認知機能と意欲が改善する。

III. 研究目的

施設入所の認知症女性高齢者に対して、集団で実施するフェイスクアプログラムを開発し、夕暮れ症候群の緩和と、認知機能、生活機能、意欲の改善への効果を検証する。

IV. 仮説

開発するフェイスクアプログラムはリラクゼーションをもたらし、認知症女性高齢者の夕暮れ症候群を緩和するとともに、食事・排泄・睡眠などの生活機能を維持・改善および他者とのコミュニケーションを通じて認知機能の維持・改善ができる。

V. 研究方法

第1研究として健康な女性高齢者を対象に、3週間継続して高齢者自身にフェイスクアを自宅で行ってもらい、フェイスクアが生体にもたらす反応をNIRS（近赤外分光法）による脳組織酸素レベル、皮膚血流量、心拍変動、皮膚コンダクタンスを指標として確認した。

第1研究の結果をふまえ、第2研究として1ヶ月間のフェイスクアプログラムを開発し、施設に入所している認知症女性高齢者で夕暮れ症候群を週1回以上呈する者を対象に、夕暮れ症候群の発現頻度、機能的自立度評価法（FIM）、前頭葉機能検査（FAB）、意欲の指標を評価項目として、フェイスクアプログラムの効果を検証した。本研究は聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認（承認番号13031）および愛知医科大学医学部倫理委員会の承認（承認番号13-029）を得て実施した。

VI. 結果

第1研究：女性高齢者が自身で行うフェイスクアがもたらす前頭前野における組織酸素レベルと自律神経反応に関する基礎的研究

65歳以上の女性高齢者18名（平均年齢 68 ± 4 歳）を対象とした。3週間継続した後に測定した反応は、血液量の指標となる組織酸素化指標（TOI）と総ヘモグロビン濃度の相対値（nTHI）はフェイスクア開始後に低下し、心拍変動HF成分はフェイスクア時に上昇した。心拍変動LF/HF、皮膚血流量、皮膚コンダクタンスには変化はなかった。

第2研究：施設入所の認知症女性高齢者へのフェイスクアプログラムの有効性の検討

グループホームに入所している夕暮れ症候群を呈する認知症女性高齢者59名（平均年齢 86 ± 5 歳）を対象とした。1ヶ月間のフェイスクアプログラム実施により、夕暮れ症候群は全体的に緩和され、特に「帰宅要求または外に出ていこうとする」「歩き回る」「落ち着きがない、興奮する」「世話をされるのを拒否する」「同じ動作を繰り返す」の出現頻度が減少した。機能的自立度評価（FIM）において、運動項目のセルフケア項目である更衣（上・下）の自立度が改善され、その他の運動項目は維持された。FIMの認知項目であるコミュニケーション、社会的認知のすべての小項目および前頭葉機能検査の成績は改善された。意欲の総合評価も向上し、特に「意思疎通」と「食事」に対する意欲の向上が見られた。

VII. 考察

65歳以上の健康な女性高齢者における基礎的研究では、情動の感知に関与する前頭前野の神経活動の抑制と自律神経指標の反応から、健康な女性高齢者自身で行うフェイスクアはリラクゼーションをもたらし、ストレス反応は示さないことが示唆された。この結果をふまえて、認知症女性高齢者に対する集団で行ったフェイスクアプログラムは、フェイスクアによるリラクゼーション反応に加え、看護・介護者の関わりや他者とのふれあいにより、活気や楽しさなどポジティブな方向へ気分の変化が生じたことが夕暮れ症候群の緩和につながった。さらに、フェイスクア行為の遂行や自己への認識が

高まったことが更衣動作を主とした生活機能の改善や認知機能の改善、意欲の向上をもたらしたと考えられる。今後は看護・介護の現場で認知症高齢者へのセルフケアへの援助として、医療機関などにも実践の場を広げ、より現場の状況や対象者に合った効果的なフェイスクケアプログラムを構築していく必要がある。

VIII. 結論

フェイスクケアは健康な女性高齢者にとってはリラクゼーション反応をもたらし、認知症女性高齢者へのフェイスクケアプログラムの実施は夕暮れ症候群の緩和と生活機能の維持・改善、認知機能の改善、意欲の向上に効果があることが認められた。

論文審査の結果の要旨

本研究は、高齢社会において大きな問題となっている認知症高齢者に対して、症状の緩和や生活機能の改善を目指したフェイスクアプログラムを開発し、その効果を検証したものである。最初に健康な女性高齢者を対象にした基礎的研究（第1研究）を行いフェイスクアが生体にもたらす生理学的な反応を確認した後、第2研究として集団で実施するフェイスクアプログラムを開発し、グループホームに入所している認知症女性高齢者59名に1ヵ月間適用して、夕暮れ症候群の緩和、認知機能・生活機能の改善、意欲の向上からその効果を検証している。

開発されたプログラムは、従来の化粧療法とは異なり、日常生活におけるセルフケアとして認知症高齢者自身で実施するという画期的な内容であり、評価に関しても施設職員の協力を得て様々な角度から綿密にデータを収集しその効果を検証したことは高く評価できるものである。

今回のプログラムは、グループホームに入所している認知症女性高齢者を対象としたものであるが、医療機関や高齢者の生活する他施設への応用も可能であり、現場での具体的な活用および研究の新たな展開が大いに期待される。本プログラムは、対応が迫られている認知症高齢者への支援を考える上で大きな貢献をすると考えられる。

以上の結果から、審査委員会委員全員により、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認められた。